慈酒

ものがたり

ツーチー　2020年1月　277

●表見返し　文・證厳法師　訳・済運　撮影・黄筱哲

揺らぎない願と行

心身に疲労を感じなくなれば、忍耐力は成就する。
清らかな信心は忍耐力と怠らない心を養う。
三宝を敬えば、智慧は深まり、行いも厳粛になる。
清らかで穢れがなければ、願と行は揺るぎないものになる。

慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
教育の進むべき道　慈願／訳　4

【主題報道】
願行は常の如くに　慈願／訳　8
国際　苦難のあるところに蓮の花が咲く　善耕／訳　10
国際　慈済が国連実務に参与、国境なき使命　済運／訳　16
慈善の行動力　台湾に根付かせる　明陛／訳　20
慈善　暗やみの人生で道を模索する　心嫈／訳　26
慈済の慈善モデルを世界に分かち合う　惟明／訳　33

教育志業の影響力と社会実践　明澔／訳　42
教育　救援と防災を並行して・校舎の改築　黒川由希／訳　46

【證厳法師のお諭し】
生命を使って道を切り開き、慧命を用いて導こう　慈願／訳　66

【ボランティア人物誌】
悪役オジサンから許師兄に　本諦／訳　72

【人文教育】
慈済大学見晴医療奉仕隊の晴天を探す旅　慈願／訳　83
部族の子　医者になり故郷へ戻る　慈願／訳　95

【行脚の軌跡】
シルバー世代の養生法　済運／訳　100
慈済大記事【十二月】　済運／訳　106

表紙

台湾では、慈済の毎月の援助によりかろうじて生活を維持している家庭が２万世帯以上ある。各方面からの愛の募金だけでなく、長期的なケアは全てボランティアの無償の奉仕によって支えられており、慈善の行動力で以て全方位に守られ、台湾の隅々にまで行き渡っている。（撮影・黄筱哲）

教育の進むべき道

◎訳・慈願

慈済（ツーチー）の済度は慈善による奉仕に始まり、その後教育志業を繰り広げてすでに満三十年になる。ボランティアは奉仕と人文を糧とした関心を、慈済の学び舎に寄せてアイボリータワーを展開し、現在社会に大きく貢献するとともに世界中に福祉のうねりを巻き起こしている。

例を上げると、今年の四月にイギリスの高等教育専門誌「ＴＨＥ」から発表されたＴＨＥ世界大学ランキングに、慈済大学はその名を連ねている。また国連開発計画の定めた「持続可能な開発目標（ＳＤＧ）」の十七項目中十一項目による総合的評価において、世界で六十七番目、台湾では一位だった。「健やかな心身と社会福利」と「消費と生産様式に確かな永続性を」という二項目の指標において、慈済大学は台湾の大学の中でも顕かに抜きんでている。

また慈済科学技術大学の「地域包括ケアと高齢者の健康促進」及び「農産品の精緻な研究開発」では教育部企業社会責任ＣＳＲの計画補助を受けている。前者はまたＣＳＲの最優秀実践賞をも獲得していた。農産品及び看護機具の精緻な研究開発に努め、国内外で多くの発明賞を獲得している。

以上の例から見て、慈済高等教育の場では地域社会や人類の生存環境に対して関心を寄せており、学術、専門知識を通して、社会に実践能力と影響力を発揮していることがわかる。この学風は人格薫陶の助けになっているだけでなく、今教育の進むべき道の青写真を示しているといえる。

教育の伝統的使命は、人材教育と知識の累積を進めることにある。しかしながら資本主義は、経済優先の考慮を受けて、高等教育に職業訓練を期待しているといえる。一旦景気が下落すると、悄然とした就職市場には学歴も価値のないものに代わってしまい、教育までが連帯責任を問われてしまう。この時、教育は知識という力をいかにして貢献すればこの困難から抜け出せるのだろうか？

ボランティア奉仕の力をかりて、社会に入って問題を見つけ解決する場合、慈済の教育体系では社会的責任と影響力を素早く形成できることに重点を置いている。慈済科学技術大学の教師と生徒のように長期ケアボランティアの拠点に投入して地域の年長者の健康問題を理解したり、看護の分野から補助器具を開発したりすることなどであり、その中にはＡＰＰ携帯装置や補聴器の開発等が含まれる。また年長者の健康に関するデータを集めることは、同時にその人専用の健康管理を提供することになり、生活品質の改善に役立つはずである。

二〇一八年世界経済フォーラムが示すように、世界の前三大問題は、気候変動、衝突と戦争、並びに貧富の差の増加である。これらは全人類に影響する重大問題で、そのすべては地元の人脈と連携が必要だが、教育で得た知識の実践が更に重要となる。

本期の主題報道では、慈済の建設支援である減災希望工程が徐々に完成して使用されつつあり、慈済は他の社会福祉機構と公益合作を行っている。慈善と教育を密接に結びつけ、一歩一歩着実に人材育成の礎を築き、教育の進むべき道を示している。（慈済月刊六三六期より）

願行は常の如くに

細い小さな流れで良い事を成就し
世界に慈善の足跡を残そう

慈済志業の源は五十数年前の一念により、
発展が遅れていた花蓮で第一歩を踏み出した。
寄り添う慈善の最初の一雫は今世界へと邁進している。
すべては世界中からの一点一滴の愛の心による成就である。

一滴の水も河となす。この河にその一滴はなくてはならない。
二〇一九年にあなた達の同行があったことに感謝します。
数限りない世間の苦難に対し、
慈済は小さな一粒の砂ほどであれども、終始初心を忘れず、
努力して愛の共鳴を喚起させよう。
この砂粒もガンジス川の砂となるよう努力し、
天地間の至る所が平和平安になるように努力をしよう。

設計・黄筱哲　訳・慈願

二〇一九年　世界で起きた天災と重大事件

苦難のあるところに

蓮の花が咲く

極端な異常気象が災害の規模を大きくし、人心の不調和が際限のない災難をもたらしている。苦難に満ちたこの世に愛は欠かせない。各国に分布している慈済人は近くの支援にも国境を越えた支援にも尽力している。更に、現地の人たちを慈善活動に導き、愛を根付かせている。

訳・善耕

●モザンビークは今年3月、サイクロン・イダイによって甚大な被害を被った。慈済ボランティアは重被災地で被害の調査と食糧の配付を行った。4月と5月には建材と農作物種子パックの大規模な配付をニャマタンダ地区で実施した。（撮影・蕭耀華）

2019年慈済の災害支援マップ

フィリピン マニラ火災（撮影・Chad Dizon）

ジンバブエ　サイクロン・イダイ被害

インドネシア パプア州　ジャヤプラ水害

中国 青海省 雪害（撮影・辺静）

全世界における慈善活動歴の累計

（慈済月刊６３６期より）

慈善人道支援：**100**の国と地域　（2019年９月現在）

学校の建設支援：**16**の国と地域で計**230**校
（2019年９月現在）

住宅の建設支援：**15**の国と地域で
計**18,730**世帯（2018年末現在）

慈済人医会の施療対象：　（2018年末現在）
50の国と地域で延**3,087,016**人

世界に分布する慈済の拠点：**60**の国と地域
（2019年９月現在）

ミャンマー　バゴー省ニャンレイピン市 水災　（写真提供・ミャンマー連絡拠点）

オーストラリア　ビクトリア州の森林火災　（撮影・黄子云）

国境なき使命

◎文・林美鳳（ドイツ慈済ボランティア）　訳・済運

アメリカ・ニューヨークにある国連本部の入り口ロビーには破れた国連旗が、周りに飾られた象徴的で意義のある各国からの寄贈品と対称的な印象を人々に与えていた。

イラクから持ち帰ったその紺色の旗は、二〇〇三年八月十九日に国連駐イラク事務所が車爆弾の襲撃に遭った時、現場に掲げられていたものである。その車爆弾による事件は国連史上最も重大な襲撃事件の一つになった。国連特使セルジオ・ヴィエイラ・デ・メロを含む二十二人が死亡し、負傷者は百五十人余りに上った。また、それは歴史上初めて、中立の国際人道主義団体である国連がテロ事件の標的となった事件でもある。

今年七月、私は他のボランティアと共に慈済を代表してニューヨークで国連永続発展ハイレベル政治論壇に参加した時、その破れた国連旗を見てショックを受け、『法華経・五百弟子受記品』の経文を思い出した。フルナミタラニシがブッダの前で発願した言葉である。「最も険悪な場所に行って伝法し、どんなに罵られたり辱められ、叩かれ斬られても、この身で以て恩に報いるために法の犠牲になることを誓います」。

世界各地で災害が絶えず、助けを必要としている人や虐待されている弱者たちが増え続けており、人道支援はとても危険である。往々にして地上で最も危険または貧困な地域に出向かなければならず、様々な自然災害による劣悪な環境に直面するだけでなく、人同士の衝突地域では威嚇や脅しを受けたり、生命の危険に至ることもある。

今年、国連の報告によると今、人類が直面する危機の中でも地球の温暖化と極端な異常気象が与える生存への脅威が最たるものである。毎年平均して三・五億人が気候変動と関連のある災害で影響を受けている。生物の多様性が失われつつあり、食糧不足と貧困問題が益々深刻さを増している。そのほか武力衝突や暴力が生命に危害を加え、社会を崩壊させている為、約一・四二億人が人道支援を必

要としている。

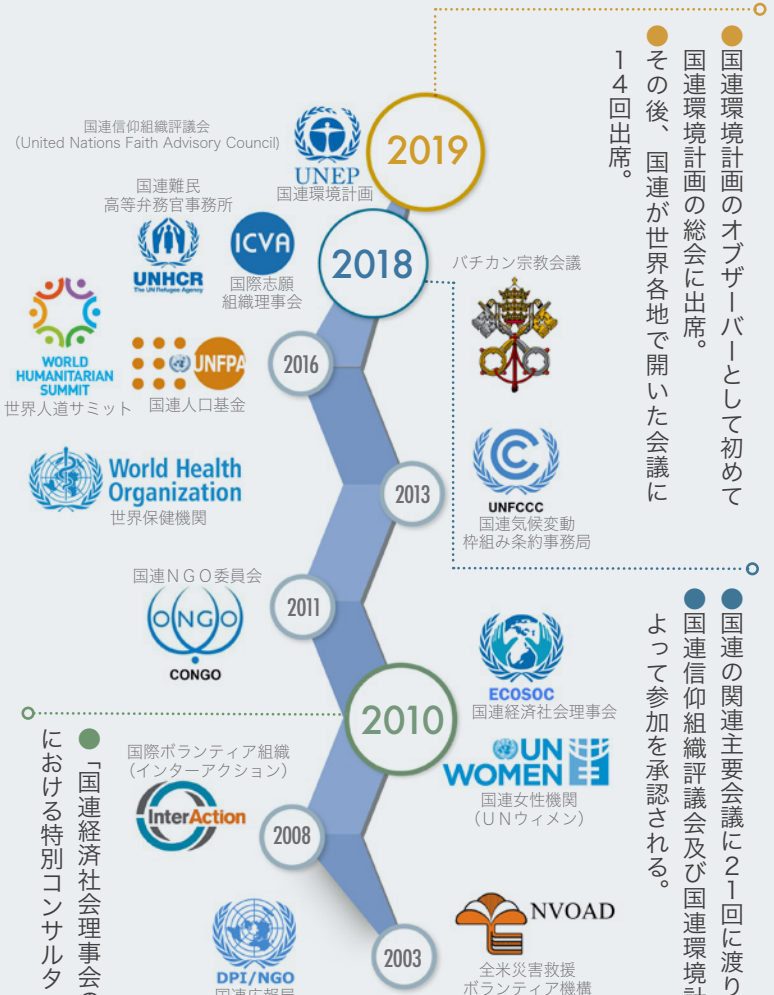
今年九月の国連総会でグテーレス事務総長は、「世界は重大な挑戦を受けており、一会員国や一組織で解決できるものではなく、皆で考え、行動しなければならない」と言った。国連は、組織の運営方式を調整しなければならないことを認識した。政府間の協調に頼るだけでなく、各方面からの協力によって専門知識と技術を得て、社会のあらゆる面でそれを発揮することで全世界に影響力を広めることができるのである。

慈済が国連の関連実務に参与することは、組織のプラットフォームで異なった国や組織と経験を共有したり、提言を行うことができると共に、世界各地で様々な永続発展プロジェクトの推進に参加できることを意味する。それはまた人類の福祉に尽力することであり、證厳法師が全ての慈済人に期待している「国境なき使命」を担うことに当てはまる。

（慈済月刊六三六期より）

慈済と国際社会の出会い

人道支援や気候変動、環境保全、若者の公益、女性の慈善参与などを軸に、世界的な主要プラットフォームで慈済ボランティアによる世界での慈善活動の軌跡を紹介することで、より多くの人が善行するよう啓発すると共に、善の輪を広げている。



- 国連環境計画のオブザーバーとして初めて国連環境計画の総会に出席。
- その後、国連が世界各地で開いた会議に14回出席。
- 国連の関連主要会議に21回に渡り招聘される。
- 国連信仰組織評議会及び国連環境計画の賛同によって参加を承認される。
- 「国連経済社会理事会のNGO組織における特別コンサルタント」になる。

慈善の行動力

台湾に根付かせる

台湾では、毎月二万世帯余りの弱者家庭が、慈済のケアで危機を免れている。各方面からの愛の義援金は困難を乗り越えさせるだけでなく、年長者の穏やかな生活を維持し、視覚障害者の職業訓練、突発的な緊急支援や予防的な慈善行為にまで及んでいる。これら長期的な奉仕活動は完全にボランティアの無償の行為に支えられており、慈善の行動力で以て全方位に台湾を守り、深く根付かせている。

図表設計・葉又華
撮影・黄筱哲　訳・明陛

コミュニティーの慈善活動に参加しよう

慈済支部を拠点に各種慈善活動を展開する。
地域ケアのネットワークに参加しよう。

地域教育

防災支援センター

健康促進

思いやりと扶助

慈済の災害支援方法

本部

- 所在地：花蓮本部（静思精舎）
- 指揮団体：防災協調総指揮センター
- 友好的連携関係：
  国家災害防救テクノロジーセンター、国家地震センター、中央災害応変センター、中央気象局、消防署、水利署等

合心チーム

- 全台湾16カ所の静思堂
- 合心防災協調センター
- 各県や市の自治体、消防署等

各地域

- 各地域の慈済連絡所
- 和気防災協調センター、地域奉仕センター
- 各町村役場、村長、ボランティア、善意の大衆等

災害支援センター

49カ所

の緊急支援物資倉庫が台湾全土に分布されている。

地域教育

全人学習教育

児童、青少年から大人まで、各種補習や学習教育クラス、成長キャンプなど、弱者家庭のケアや地域住民の学習成長のニーズに応える。

ボランティア養成

地域ボランティアの養成、実務交流及び募集：青年公益人材の育成プラットフォーム。

慈善展覧

長期ケア世帯に対して音楽や美術の創作を励まし、地域の住民を招いて鑑賞する。学術研究への協力推進。慈済四大志業の案内と解説等。

宗教に対する関心

灌仏会や歳末祝福会などの活動を行う

環境保全

資源回収、分類と
教育体験及び呼びかけ等

健康促進

山岳地帯　定期、定時の往診

学校　薬物使用防止教育、衛生教育

弱者群　ケア家庭、ホームレス、外国人労働者への健康診断：行動の不自由な身心障害者と福祉施設などへの健康ケアサービスの提供。

コミュニティー　医療保健講座：年長者ケアセンターを設け、様々な方法で手助けする。

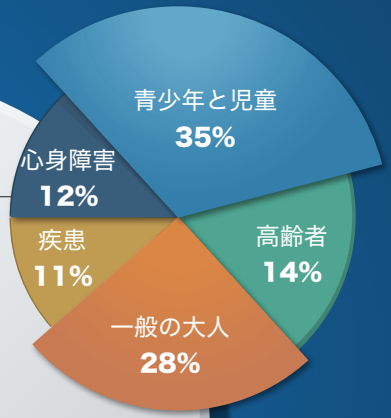
思いやりと扶助

防災支援センター

世帯　台湾の慈済人は毎月、平均して二万世帯余りの家庭にケア訪問をしている。ケースバイケースで生活の補助や短期的な緊急補助、家屋の修繕、奨学金などがある。

山岳地帯　現地で「酒の代わりにお茶」健康推進活動、村落教室、生計のための産業復興などの地域確立方案がある。

コミュニティー　養護ホーム、心身障碍者、孤児院、ホームレス支援団体などの社会福祉機関と刑務所の警備機関への慰問活動と協力関係方案。



2019年1から9月まで慈善ケア

- 報告事案　10,175件
- 長期ケア　延べ87,709世帯
- 家庭訪問　延べ109,089世帯
- 緊急援助　10,121件
- 住環境改善　209件
- 学費補助　延べ5,236人

機関との協力52件
機関への慰問393カ所

暗やみの人生で道を模索する

視覚障害者を社会的に支援模索する

「台湾盲人重建院（視覚障害者職能開発施設）」は中途視覚障害者の生活再建のための職業訓練を行っている。慈済は公益団体との協力の下にマッサージ師養成講座を補助しており、今年で四年目になる。中途視覚障害者が専業マッサージ師になり、社会復帰ができるように支援している。

◎文・陳麗安　撮影・蕭耀華　訳・心蓥

ごく自然に歩き、慣れた道を通ってお客さんをマッサージ室に案内している人が視覚障害者であることは言われるまで気づかない。

昨年、台湾盲人重建院を卒業したばかりの黄国豪（ホアングオハオ）と闕文莉（チュエウェンリー）は、二人とも病気で失明して視覚障害者になった。彼らが人生のどん底にいた時に、重建院で希望を模索した。

彼らは盲人重建院で改めて生活技能を学習し、今では、自力で調理や洗濯、パソコンの使用など、失明の後にはできなかった日常生活を取り戻した。さらに一人で外出することも家族に頼らずできるようになった。また、キャリアを建て直すため、訓練を受けてプロのマッサージ師になって、生活費を稼ぎ、社会復帰するだけでなく自信も取り戻したため、「役に立たない人間」といわれる心配もなくなった。

失明した当時は気持ちが沈んで絶望のどん底に突き落とされたが、今では、過去についても朗らかに話せて自力更生することができた。黄国豪と闕文莉もまた盲人重建院の救いの手で、崖から落ちそうになっていた人生を取り戻した。

失望、絶望を乗り越えて、希望に

新北市新荘区中正路に面した青と白の昔ながらの平屋は、過ぎ去る年月に耐えられず、老朽化した外壁はすでにぼろぼろになっている。ここは一九五一年に設立され、六十年以上経っている台湾盲人重建院である。

台湾の中途視覚障害者は年間千人以上の割合で増加している。彼らが自立した生活を送る術を学習し、キャリアの立て直す場合に台湾盲人重建院は重要な支援機構の一つとなっている。視覚障害者世

帯の負担を軽減し、彼らが立ち上って職場に復帰することを励ますため、院内で提供するカリキュラムと訓練は全て無料である。

社会復帰コースの訓練期間中、学生は院内で寄宿することになっており、また各自のニーズに合わせて、適切なコースが選べる。重建院の職員林夏妃（リンシアフェイ）は、「自立して生活できるまでの所要時間は、速い人は約半年から一年で、遅い人は二、三年かかることもあります」と述べた。

長い間、職業訓練コースと生活再建に必要な費用は、労働部の助成金と重建院の募金に依存しているが、経費が大きいため赤字続きである。とりわけ、ここ十年来社会の変化にしたがって、また詐欺事件が多発していることで、寄付する人の意欲が徐々に低下し、資金調達の正当性と真実性にさえ疑問を呈している。

視覚障害者の生活復帰を支援する重要な拠点の運営が続けられるように、台湾盲人重建院は二〇一六年から慈済基金会と「公益協力協定書」を取り交わした。視覚障害者が社会と職場に復帰出来るよう、慈済が協力することに期待した。慈済は「クラスCマッサージ師養成班」の学生たちが安心して受験準備に専念できるように彼らの生活費を助成している。今年で協力して四年目になり、合計四十七人の視覚障害者学生がクラスCマッサージ師に合格して順調に職業に就いている。

慈済基金会のソーシャルワーカーである徐瑞琼（シュールイチョン）は、「慈済のケア世帯で家族が中途視覚障害者になるケースは少なくないのです。一部の視覚障害者は元来は家庭の大黒柱だったのですが、視力低下のために働けなくなり、生活に困難をきたすようになりました。ボランティアは寄り添いながら視覚障害関連の資源を探す手伝いをします。『心身障害証明』の

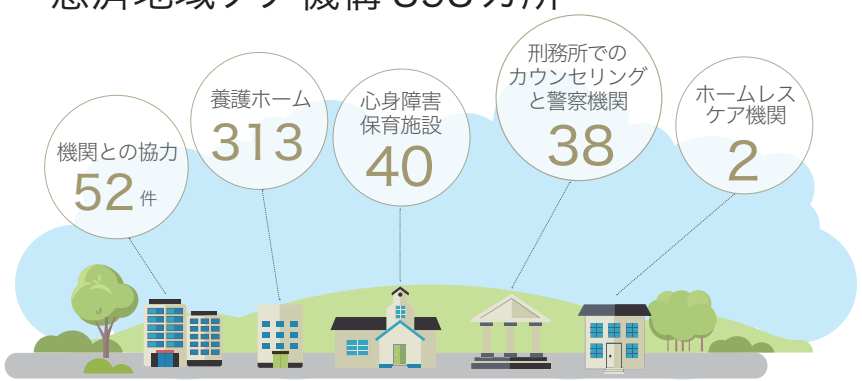
●台湾盲人重建院は、毎年およそ1000人の視覚障害者にサービスを提供している。院内各種の学習コースに加えて、教師は学生を連れて外で「方向性行動トレーニング」を行い、学生が白い杖を使用して方向と空間の概念を確立し、単独で安全に目的地に到達できるよう指導している。

有無を確認したり、視覚障害者世帯としてどのような社会福祉の支援が得られるのかを探すのです」と説明した。

ボランティアは視覚障害者に寄り添う

水曜日の夜、マッサージ教室から笑い声が聞こえてきた。慈済ボランティアは、毎月少なくとも一回、夜の時間に来て、学生たちとゲームをしたり、「證厳法師が語る物語」のビデオを再生して音声を聞かせたり、「竹筒歳月」の話をしたりして心得を

慈済地域ケア機構 393カ所



対象：知的障害者施設、矯正施設、留置場、養護老人ホーム、警察署や消防署など
内容：慰問、公益の調達、物資及び経費の支援
統計：延べ171,993人が恩恵を受けた。
延べ47,047人のボランティアが参加した。(2018年)

分かち合っている。

徐瑞琼は、「学生の中にはカトリックやプロテスタントの信者もいますが、信仰が違うからと言って参加しないようなことはありません。竹筒歳月の話をした時も善行に宗教の区別はないと信じており、自発的に竹筒を持ち帰りました。また、可能な限り他の視覚障害者を助けるために、定期的に寄付する学生もいます」と話した。

夕方の自習に加えて、慈済ボランティアは学生たちが本格的に職業訓練を受ける二、三カ月前に人文講座を企画し、同じ障害者を招いて、そのライフストーリーを分かち合ってもらっている。

晴眼者は、視覚障害者の生活がどれほど不便なのか、想像し難いであろう。彼らは一歩踏み出すだけでも不安なのだ。特に頼りの白い杖を不適切に導くのは恐怖を感じさせると同時に怪我させやすい動作である。従ってボランティアは重建院で学生に付き添う前に、先ず「視覚障害者」の日常を体験することから始め、専門家から「人導法」と視覚障害者に適切に寄り添う方法の指導を受けなければならない。

ボランティアは付添いを使命と見なし、学生が安心して信頼できる関係を確立し、また様々なレジャー活動において彼らを世話している。たとえば、年に四回ある院外指導では重建院の職員が共に

学生に同行してバス乗車を体験し、新荘区の旧市街地を知ってもらったり、ボーリングや故宮博物館見学までする。

適切な付き添いは、視覚障害者にとって一種の心の拠り所であり、さらに大きな励ましである。慈済ボランティアと盲人重建院の職員たちは、全ての視覚障害者が心と目の障害を乗り越え、さまざまな学習やかかわりあいの経験を通して人生の価値を見つけ、自分を信じて勇敢に人生を変えることを期待している。

（慈済月刊六三六期より）

●慈済ボランティアは重建院で学生たちとゲームをしたり、ストーリーを分かち合ったりするだけでなく、学生が昼間のクラスで学んだマッサージのスキルをボランティアの体で実地に練習する。

慈済の慈善モデルを世界に分かち合う

この半世紀余り、慈済の慈善モデルは社会に大きく貢献している。我々は慈済の優勢を活用し、世界に対してより大きなプラスの影響力を発揮しなければならない。

◎口述・顔博文（慈済慈善事業基金会執行長）
取材と文・李委煌　撮影・黄筱哲　訳・惟明

（撮影・林家如）

慈済の慈善志業は台湾に始まり、世界へ踏み出している。慈済は能力を活かして、災難がある所や苦難を受けている人々がいれば、慈済ボランティア

は救いの手を差し伸べている。

この数年来、慈済慈善事業基金会の年度慈善支出を分析すると、八割以上が台湾に使われており、海外向けの支出は相対的に少ない。慈済は国際慈善活動すると同時に、「現地ボランティア」の育成にも力を入れている。即ち志業や慈善の永続には必ず現地の資源と人材を投入してこそ着実に、自力更生と自給自足ができるのである。

台湾の慈善には深さ、そして海外での慈善には広さが要求され、両者とも推進する上で、時代の変遷に応じて臨機応変に調整されるべきである。国際化と地域化の同時発展の趨勢は、何年も前から「地球規模且つ地域化」（globalizationとlocalizationを合わせた造語）を打ち出してきている。

半世紀以来、慈済は長期支援、緊急支援、冬季配付、大規模災害支援など人文の特色を備えた人道支援の経験を積み重ねてきた。現在、地球と人類が直面している危機に対応するために、慈済の歩調もまた刷新されている。今年は九二一大震災の二十周年と、モラコット風災（平成二十一年台風八号）十周年を迎えた。台湾は地理的に地震や台風に襲われやすい。当時を振り返って見ると、被害の凄まじさには心が痛む。今日に至って、地球は頻発する災害を通して、全人類に警鐘を鳴らし続けている。それに対して世界は皆で正視する必要がある。

世を震撼させる災難に対して人々は戒を慎み、敬虔に素早く行動をとるべきだと證厳上人は早くから呼びかけてきた。慈済は長期にわたって気候の変動に注目し、国際間でも今は地球温暖化の深刻さを認識している。

受け入れ難い気候変動

二〇一八年の世界経済フォーラムで参加者を対象に世界が直面している最も深刻な問題についてのアンケート調査をしたところ、「気候変動」がランキング一位になっていた。

ＰＷＣ会計士事務所は毎年台湾を含め、企業規模が五億ドル以上の企業千社のＣＥＯに対して調査をしてまとめた「二〇一九グローバルＣＥＯ展望」によると、気候変動が初めて成長企業リスクランキングで一位になった。

言い換えれば、地球温暖化と気候変動は実質的に人類の経済発展に影響を及ぼしている。問題が切実に感じられたから、終に皆が重視するようになった

のである。

二〇一九年世界経済フォーラムで、ＩＭＦと世界銀行の首席は期せずして一致して「気候変動の防止策を積極的に講じなければ、自然災害による人命や経済損失はもっと大きくなる」と言った。肉食を減らすことは二酸化炭素の排出削減と温暖化抑止に効果があることを国連の気候変動に関する政府間パネル（ＩＰＣＣ）も発見した。即ち菜食は地球環境に優しい食生活とライフスタイルの一つなのである。

●慈済志業には多くの「宝」が隠されている。慈済が台湾で３０年間推進してきた環境保全（エコ）活動は多くの人の環境や消費に対する反省と意識に影響を及ぼしてきた。これは一種美しい悟りを伴った心の循環になっている。

ネット情報が多様化している昨今では、若者は様々な国際情報を素早く手に入れることができる。しかし、幅広く情報が入る以外に、もっと重要なのは人々がこの共通認識の価値を生活の中に取り入れ、実践することであり、そこで初めて今、地球が直面している問題を改善することができるのだ。

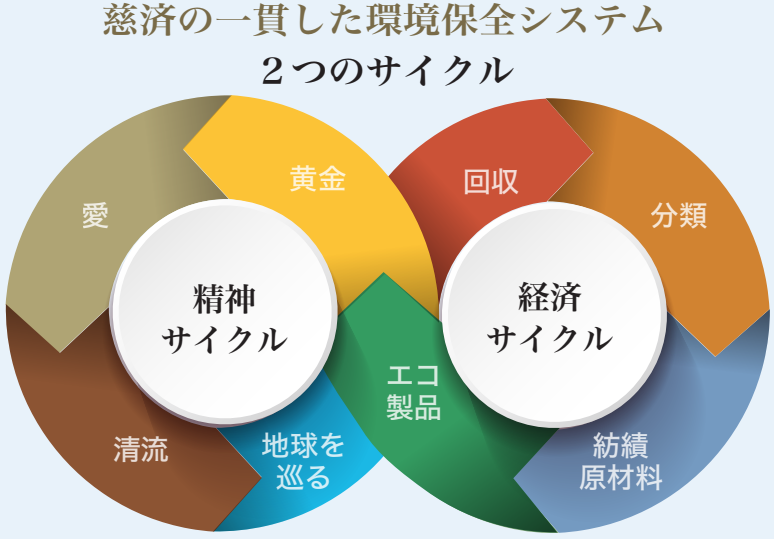
貴重な経験を世界とシェアする

慈済の四大志業には多くの「宝」が隠されている。例えば、慈済環境保全志業は今年で三十周年になる。中でも回収、分類、粒状、紡糸、紡織、販売など様々な過程で「エコ糸」のサプライチェーンを形作っており、それは世界が今重視している「循環経済」（Circular Economy）でもある。

慈済の環境保全は完全な経済サイクル

を創造している。製品化を通して人々にもっとエコの理念と価値を重視させているだけでなく、そこから得た収益を大愛テレビ局に投入して善美の情報やテレビ番組を全世界に発信することによって多くの人に感動を与え、エコ・ボランティアを目指す人を増やしている。従って、慈済の環境保全活動は「経済サイクル」以外に、「精神サイクル」をも創っている。二つのサイクルを繋げば、まるで数学の「無限大∞」符号のように途切れることなく、更に多くの人がエコに努め励むように呼びかけている。

私は、経済サイクルと精神サイクルの



両面を持つ慈済のエコ・モデルは世界でも唯一無二のものであり、世界各地に出しても「ハイライト」であると思う。

その他、慈済の「無言の良師」がある――亡くなった後、遺体を医学教育や模擬手術の為に寄贈する「遺体先生」は各界に認められ、人々は学習に訪れている。又、慈悲の科学に関する研究開発や非血縁者間の造血幹細胞寄贈運動、国際災害支援のモデル等全てが、全人類に有益な宝であり、国際舞台における模範と言える。もしも慈済が創造した人道支援の経験を論述すれば、世界に披露する機会が得られ、さらに多くの人に見て感動してもらえるだろう。

慈済には、尊敬に値するボランティア達を紹介するモデルが沢山ある。彼らは宗教精神と結合した、無償、自費、自分の時間、寄付のモットーの下に社会奉仕に参加している。これこそが国際社会の舞台で声を上げ、さらに多くの国際人に参加を呼びかけるのに値する唯一無二のものである。

データがプラスの影響力を表す

心の面から見ると、慈済人の慈善ケアに要求も条件も設けないというのは、

證厳法師が常に言っているように、慈済人にとって善行は日常の本質であることに由来する。見返りを求めないごく自然な行いなのだ。前足を踏み出したら後ろ足を地面から離す。これも仏の教育の本懐である。

今の社会は統計や分析によるデータの数値化を重視している。慈善団体にとっても数字と数量はとても重要で、そうしなければ、組織の運営成果は測りようがない。特に人々は慈善組織にたいする期待とレベルが日に日に増しているため、「数字がものを言う」ように、数値化したデータを出さなければならない。

客観的に多方面から評価し、数値化した慈善項目の全体的な貢献は、ＳＲＯＩ（Social return on investment）の精神である。それは「社会的投資収益率」と訳されるが、私は「社会的プラス影響力」と解釈した方が慈済に適していると思う。それはボランティアにとって良い啓示と励ましにもなっている。

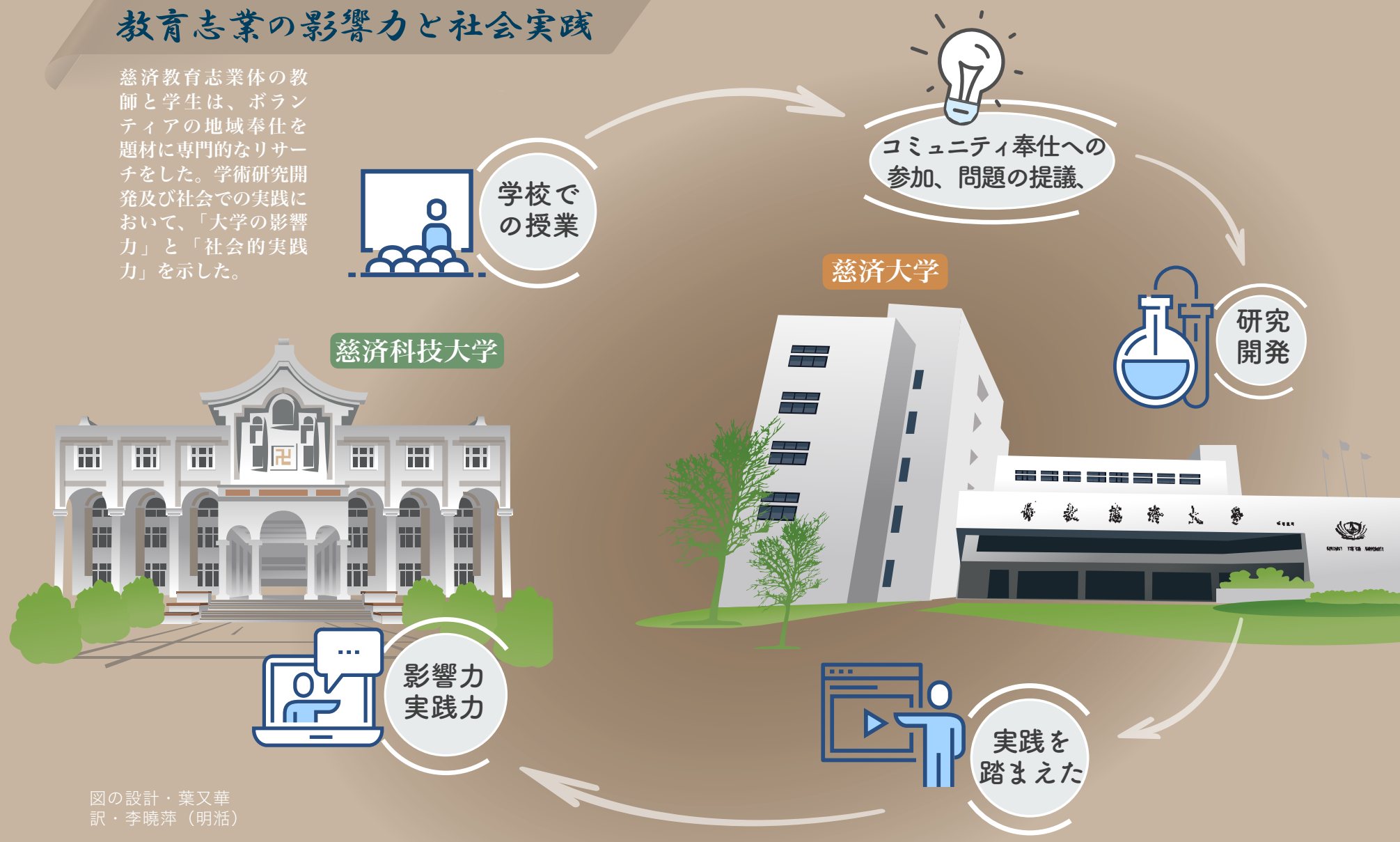
慈済は半世紀余りの慈善活動の努力と累積で社会に多大な貢献をしてきた。我々はその優勢を活かして、世界により大きなプラスの影響力を発揮すべきである。この数年来、国連や国際組織が様々な活動に慈済の参加を招き、慈済にホスト役として、発表、或いはエコや国際災害支援の成果を発表してもらっており、国際舞台を通して慈済のプラスの影響力をもって世界が一層美しくなることを期待している。

（慈済月刊六三六期より）

●慈済の「エコ・一貫システム」は回収から分類、粒状化、紡糸、紡織、販売などの多様な過程を経て、１つのエコ糸のサプライチェーンを形成しており、世界が注目している循環経済の手本になっているだけでなく、気候変動の速度を緩め、生存危機から地球を救う為の慈済の努力を示している。

教育志業の影響力と社会実践

慈済教育志業体の教師と学生は、ボランティアの地域奉仕を題材に専門的なリサーチをした。学術研究開発及び社会での実践において、「大学の影響力」と「社会的実践力」を示した。



図の設計・葉又華
訳・李暁萍（明活）

慈済科技大学

長期ケアに関して、教師と学生は認知症コミュニティサービス拠点の設立に参与した。

教育部からＵＳＲ（University Social Responsibility 大学の社会的責任）プロジェクト補助を受けると共にベストプラクティス賞を受賞した。

- 校内と吉林郷福興村、秀林郷佳民村に３カ所のサービス拠点の設立を申請し、日本の「リハビリテーションを通し、できる事を少しずつでも増やし、介護サービスを減らしていく引き算の介護（夢のみずうみ村デイサービスセンター）」を模倣して高齢者向けのケアコースを設計した。
- 高齢者の健康状態を監視できるアプリとリハビリ支援機器を開発する

革新的な研究開発、精緻な農耕と看護の分野で賞を獲得。

教育部からＵＳＲ（University Social Responsibility 大学の社会的責任）プロジェクト補助と全国イノベーション賞、2018年度国家発明アイデア賞で銀賞を獲得。

- 東部における農業のアップグレードと発展を支援する。例えば、赤キヌアやイシクラゲ等に含まれる活性物質から生物医学的ヘルスケア及びコスメの開発、更に被災した農家への無償サポート及び技術提供を行っている。
- 看護学科の教師と学生は、臨床における革新的な発明で何度も受賞している。例えば「輸液逆流防止装置」は効果的に点滴液に血液が逆流するのを防ぐことができ、簡易式薬剤抽出の安全注射器で看護師を守っている。

慈済大学

２０１９年影響力のある大学の世界ランキングで６７位、台湾では１位となった。

- 世界的に権威のあるタイムズ・ハイアー・エデュケーションが初めて評価した結果である。
- 国連の１７項目持続可能な開発目標（ＳＤＧ）の中の11項目を審査基準にした。
- 慈済大学はＳＤＧ３で健康及び社会福祉の項目とＳＤＧ１２で持続可能な消費と生産様式の２つの項目で、台湾の１位に輝いた。

２０１８台湾持続可能な開発賞を受賞した。

- 建築はグリーンビルディングを最高原則とする。
- 「環境保全の持続」関連コースは、年間全コースの８％を占める。
- 年間平均して７０回以上の環境保全教育活動を行う。
- 教師と学生は環境に優しいマイ食器を使い、廃棄物のリサイクル率は５０％以上でなければならない。

学んだことを役立てる先住民、新住民、インドネシア人向け専門コース

- １９９６年以来、先住民向け看護専門コースが設立され、今までに合計1,634名の先住民学生が卒業した。
- ２０１９年に初めて３０名の看護学部新住民特待生を募集した。５年間の学業を全額補助し、食費、雑費などを含み、家計の負担を軽減している。卒業後は慈済の医療志業体に就職することを選択できる。
- ２０１９年、初めて２５名のインドネシア人学生が募集され、一連の面接と筆記試験を受けた後、台湾に来て農業管理とマーケティングを学ぶ。

（慈済月刊六三六期より）

救済と防災を並行して

極端な災害に備える

慈済は半世紀にわたって、人道的救援活動の経験を蓄積してきた。緊急支援から、災害後の再建、そしてそれ以上に重視するのが予防的な慈善活動である。早期の貧困者のための住居修繕に始まり、今の「減災希望工程」、「防災社会教育」に至るまで、万全の準備を以て自然災害の衝撃に備えている。

●慈済が「減災希望工程」により支援建設した苗栗県の公館中学校の事務棟は、今年完成し使用開始された。（撮影・顔霖沼）

使用禁止校舎の改築
「減災希望工程」で安全性達成

◎文・葉子豪　撮影・顔霖沼　訳・黒川由希

各方面で義務教育十二年化の新課程の内容に知恵を絞っている一方で、多くの学校はいまだ教員や生徒の安全を脅かす古い校舎を建て替えることができずにいる。慈済は二〇一四年より、台湾全土で二十六の使用禁止校舎の支援建設を行ってきた。二〇二〇年に苗栗県の二校が完成し使用開始されれば、「減災希望工程」は全ての工事が完了することになる。

慈済が展開してきた二〇一四年からの「減災希望工程」は、花蓮、台東、高雄、屏東及び苗栗において、二十六の小中学校の古い使用禁止校舎の改築を手がけ、順に使用が開始されている。最後に完成した五つの支援対象校も、二〇一九年九月の新学期に新たな一歩を踏み出した。

花蓮県の三民中学校、苗栗県の後龍中学校、造橋中学校の新校舎が完成し使用を開始した。また苗栗県の公館中学校、県立苑里高校でも一部の校舎で授業が開始された。第二期工事は進行中であるが、安全を脅かす問題は解消された。慈済による老朽化した校舎の改築工事、減災希望工程の目標は達成されたのである。

花蓮三民中学校
台湾青少年野球の星

一九六八年に創立された花蓮県玉里鎮の三民中学校は、花蓮県が中央政府の義務教育九年化推進政策に対応して建設したものである。波形の屋根、片持ち梁の廊下、大きな窓を持つ設計は、当時新設の公立中学校が採用した「教室」の標準で、公立中学校に改正された初等中学校の多くが、新教室の増築に際してこのスタイルを踏襲した。しかし、半世紀にわたって風雨にさらされ、台風や地震の損害を受けたこれらの「祖父級」の校舎は、もはや子供たちを守ることができないばかりか、校内の安全を脅かす可能性すらある。

総務主任の何孟樺（ホーモンホア）さんは、改築前を思い出して言った。「一階の廊下も、二階の廊下も、鉄筋がむき出しで、雨漏れも

ひどかったのです。一番危険だったのは、コンクリートの塊が落ちてくることでした」。九二一地震でこうした建築設計は耐震性がないことが証明された。そのため、鄭健民校長は着任するとすぐに校舎改築のため奔走し、ついに二〇一六年、慈済の減災希望工程が開始されたのである。

「しかし、我々の学校が建つ土地は山岳保護地区に指定されているため、土壌保護計画を提出する必要があり、再建の進度は比較的遅いものになりました」。安全確保と法律遵守のため、三民中学校の工事は二〇一八年六月にようやく着工となった。旧校舎の取り壊しが始まると、教員と生徒は国立玉里高校に間借りして授業を行なった。

改築期間中は様々な問題があったが、生徒達の向上心に影響することはなく、多くの素晴らしい成績を残した。三民中学校の野球部は、二〇一七年全国青少年選手権大会で優勝し、U15アジア野球選手権大会に出場して二位になった。さらに二〇一八年八月の全国青少年野球においては三位の成績を残した。

「これは花蓮の歴史上、大きな出来事です」と、鄭健民（チョンジエンミン）校長は生徒達を褒め称え、また慈済の支援による新校舎についても賛辞を述べた。「一言では形容できないのですが、この校舎からは雄壮さと共に、繊細な柔らかさを感じます。この両方を兼ね備えているということは、簡単なことではないと思います」。

頑丈な構造に、柔らかい曲線。素朴なグレーを基調として、廊下の窓枠には赤、緑、黄色が配色されている。安定感がありながら、変化に富んでいる。広い廊下と、広い間隔で配置された大きな教室の窓のおかげで、採光と風通しがよく、心地よい学習環境が作り出されている。この新校舎は使用されて半年も経たないが、既に三民中学校の百十三名の生徒に恩恵を与えている。慈済の台湾東部における減災希望工程は、ここに有終の美を飾ることになった。

後龍中学校、造橋中学校
安全が確保された嬉しい入居

減災希望工程の支援を受けた県や市の中で、苗栗県は台湾北中部唯一の自治体であり、県内の中学校及び高校四校が支援を受けた。そのうち苗栗県北部に位置する後龍中学校と造橋中学校の教員と生徒は、今年の新学期より新校舎に入居した。

「旧校舎は安全上の懸念がありました。国立地震工程センターの検査で基準に達

●造橋中学校では、新校舎の建築後に旧校舎を取り壊す方法が採用された。頑丈で優美な新校舎（写真右）が完成した後、教員と生徒達は旧校舎が取り壊される前に記念撮影を行い（写真上・造橋中学校提供）、学校史の新たな1ページに立ち会った。

していないと判定され、立入禁止の黄色い紙が貼られた建物が何棟もありました。前方の事務棟、後方の教務棟、これら二棟の建物はまだら模様で、鉄筋が露出し、危険な状態でした…」。後龍中学校の熊儒卿（ションルーチン）校長は、改築の過程を振り返り、校内は比較的新しかった「至善楼」体育館を除き、その他の建物はまるで生まれ変わったように、大きな変化を遂げたと語った。

新校舎の完成後に旧校舎を取り壊す方法を採用したため、後龍中学校の教員と生徒は、今年九月の新学期から真新しい校舎に入居した。新しい教室の構造は以前のものとは違い、縦横それぞれ二本の梁が「井」の字に交差するようになっているため、全方向からの揺れに耐えることができ、また照明も格好の位置に取り付けられた。

「新校舎の照明は、吊り下げ式ではなく、梁に直接設置されています。そのため、風が強い時も揺れることはなく、生徒達の視力にとっても良いのです」。総務主任の鄧竹君（ドンジュージュン）さんが、建築設計の工夫を紹介した。それから彼女は携帯電話を取り出して、校内の写真を見せてくれた。「生徒達によれば、我々の学校はインスタ映えするホットスポットなのだそうです」。

建築支援の過程において、後龍中学校の先生は、慈済ボランティアが彼らに寄り添い、親孝行のキャンペーンや環境保護のために浜辺の清掃活動を引率してくれたことに大変感謝した。また造橋中学校では、慈済ボランティアが薬物濫用防止や環境保護についてのキャンペーンを行った。生徒達が自分を守り、大地を愛する意識を高めただけでなく、これらの活動は新校舎が掲げるグリーン建築の趣旨にも合致するものだった。

「新しい建物はいかだ基礎を採用しており、地下室は貯水庫になっています。普段は雨水を貯めておき、水不足の時に利用することができるのです」。造橋中学校の林育伸（リンユーシェン）校長の案内で、慈済人は校内を参観した。まず目に入ってきたのは、二棟の灰色の新しい建物だった。壁に施された桐の花模様が地元の客家文化の特色を表していた。

「我々の学校は、造橋郷の地震防災避難センターを兼ねていることを、建築士にあらかじめ伝えていました。ですから建築士は、鉄筋の量を増やし、耐震性の高い設計をしました」。総務主任の李啓銓（リーチーチュエン）さんの解説によれば、新校舎は旧校舎の前方にある土地に建てられ、完成後に傾いた廊下や構造に亀裂の入った旧校舎を取り壊した。そこが新校舎と後方の丘との間の緩衝地帯となった。造橋中学校の危険は解消され、安心安全の学校環境が実現した。

県立苑裡中学校と公館中学校
二〇二〇年を見据えて

苗栗県の南方海沿いに位置する県立

苑裡中学校と山沿いの公館中学校では、現在も大規模な工事が続いており、二〇二〇年九月の新学期前に全ての工事が終わる予定である。

「我々の学校には以前、全部で十七棟の建物がありましたが、全て二階建てでした。事務棟だけは高校の部ができた時に、二階分増築して四階建てにしたのです。つまり、年寄りが子供を背負っているような形です」。

県立苑裡中学校の張逢洲（チャンフォンジョウ）校長によれば、学校側の希望は、以前のように狭苦しくならないよう、なるべく空き地を設けることであった。「そこで、建て替えに際しては、全部で四棟の計画としました。三棟が教室用で、一棟が体育館です。こうすれば校内が広々として、学習環境全体が見違えるようになるはずです」。

他の支援対象校と同じく、田園に囲まれた県立苑裡中学校の古い教室は天井の鉄筋が露出していた。経費が不足していたため、ここ数年はコンクリートの塊が落ちて怪我をしないよう、鋼板で覆っていたが、耐震検査で不合格の判定を受けた。補強、改築のいずれも難しい状況にあったその時、幸いにも慈済の援助が得られることになったのである。

「我々は新入生を迎える時、保護者にこのことを伝えました。学校に新しい教室が出来ることを知って、保護者達はとても喜びました」。慈済の建築支援は、張校長をはじめとする教員達を大いに勇気づけた。だが、工事は簡単では無かった。生徒数は中学生と高校生を合わせて千人を超え、校内を一体的に設計しなければならず、新旧校舎の立地の多くが重複するため、後龍中学校や造橋中学校のように新校舎の完成後に旧校舎を取り壊すという方法は用いることができなかった。そのため、建設チームは工事を二期に分け、慈済人もまたプレハブ校舎を提供することで、教員と生徒が授業を続けられるようにした。

七十三年の歴史がある公館中学では、今年完成した新校舎の斬新さが人々の目を奪った。校門には背の高い吹き抜けがあり、校内を縦に一望できる。校門から中まで連なる三本の古い木が、歴代卒業生達の記憶に留まっている。

「後輩達のために嬉しく思います。彼らの教室は安全になりました。でも校内は変わらず、記憶すべきものはまだ残っていて、ただ教室が新しくなっただけです。間取りも採光も全てが以前より良くなりました」。

湛麗純（ダンリージュン）さんは今から四十年前、義務教

育九年化のおかげで、母校が国民中学校に改正された後、無試験で入学した第一期の国民中学生である。六十歳を過ぎた彼女は、地元の慈済人として、三年前に建築士と共に校内を視察し、学校がとても古くなっていることに驚いた。あちこちに破損の痕跡があり、コンクリートの剥落はひどく、生徒がうっかりすれば、窓枠そのものが落ちる可能性があった。保護者会の劉彦誠（リウイエンチョン）会長も言う。「あの時は入ってすぐにこの学校は危険な建築物だと感じました」。

公館中学校の校舎の危険性は十年前から指摘されていた。現校長である方麗萍（ファンリーピン）さんは前任の胡瑞蓉（フールイロン）校長の堅持と努力に感謝している。そのおかげで、一昨年に県政府が慈済減災希望工程の学校を選定する際、公館中学もその対象校となりえたのである。

公館中学校には、二十八クラス、七百余人の生徒が在籍している。工事は二期に分けて進められた。現在まだ工事が進行中であるため、多くの生徒がプレハブ教室で授業を受けているが、地元の父兄達の期待は高い。方麗萍校長は、「二棟の校舎は来年完成する予定ですが、親戚や友人からは『校長先生、慈済が私たちのために建ててくれる新校舎はどんな様子ですか、見に行きたいです』と度々言われるのです」。

公館中学校、後龍中学校、そして花蓮の三民中学校の新校舎を設計した黄建興建築士は、新校舎が震度七の激震にも耐えられるよう、教室前方の廊下と後方のベランダに柱を設けた。これ

●公館中学校新校舎の廊下に配置された円柱は建物の耐震性を大幅に上げている。また各階の壁には桐の花や柿、赤棗の図柄が描かれ、苗栗地区の客家文化の特色を表している。

は、四つの柱で空間を三分割する、より安定した構造である。

「親指を曲げて、四本の指を伸ばしてみてください」黄建興は手の指を柱に例えて説明した。四本の指を下に向けて開くと、指と指の間にあらわれる三つの空間、これが三分割構造を表す。義務教育九年化の年に大量に建設された標準教室は、これとは対照的に、人差し指と薬指で作られる一つの空間だけの構造であった。耐震性の差は明らかである。

まずは安全性を確保してこそ、美観を追求する余裕が生まれる。九月二十四日、慈済にとって百軒目で苗栗県内では一軒目の「静思閲読書軒」が公館中学校の中にオープンした。方麗萍校長は、新居に友達を招くように、来賓達をオープンしたばかりの新校舎に案内した。工期を終えた第一期の教室棟、そして建設中の第二期教室は全て南北に配置され、西日の心配をなくしてあった。

一階には桐の花、二階には柿、三階には赤棗の模様が施されている。これらは公館客家村の特産物である。方麗萍はこれら随所に見られる故郷の意匠から子供達に伝えたいことがあるとい

●公館中学校新校舎の第二期工事は今も進行中で、教室が不足しているため、工事期間中も通常通り授業を行えるよう、慈済ボランティアは校庭にプレハブ式の臨時教室を建てた。

う。「私たちはこの公館で育ったということを、片時も忘れず、いつかこの故郷に報いて欲しい。これは私達が一番伝えたい心なのです」。

高基準の施工
教員と生徒の安全は犠牲にできない

減災希望工程の歴史を振り返ると、最初に完工したのは屏東の五つの学校で、

●苗栗県立苑裡高校の支援建設工事は二期に分けて進められた。慈済基金会建設処主任の林敏朝（リンミンチャオ）さん（写真中央）と建築委員は何度も視察に訪れ、下請け業者が施工品質を確保するよう厳しく要求した。

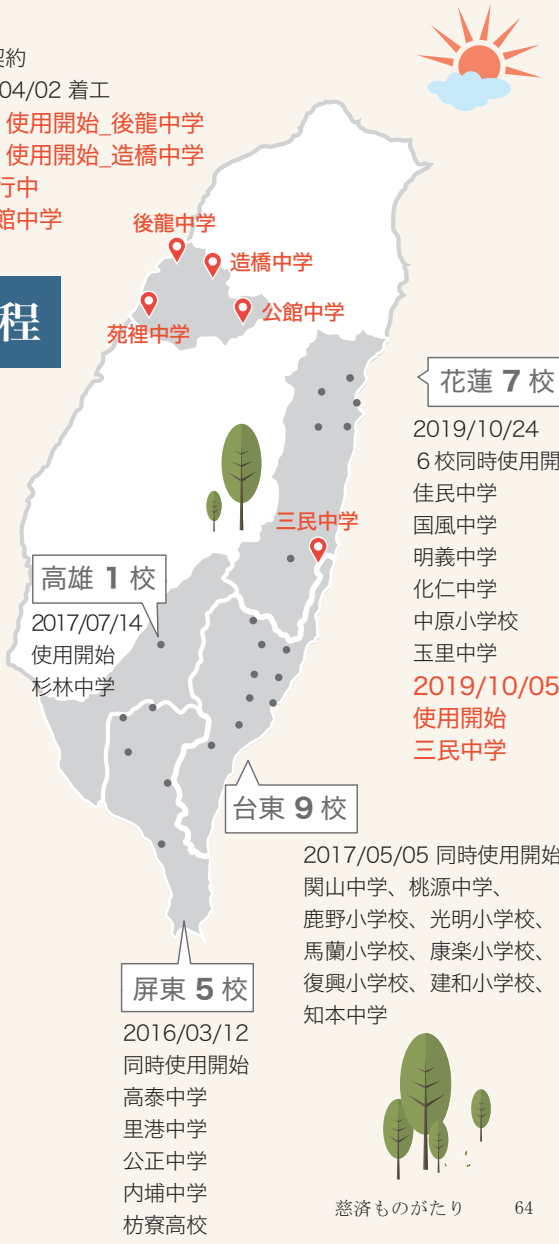
これらは二〇一六年三月に正式に使用開始された。その時、花蓮の三民中学校と苗栗県の四校は、支援建設の列に加わったばかりであった。遅い出発ではあったが、なんとか間に合ったのである。

今になって振り返ると、減災希望工程が苗栗において終着点を迎えたことに、特別な歴史的意義を感じる。なぜなら台湾では、一九三五年四月二十一日、震度七を記録した新竹台中大地震が発生したが、その震源地は今の苗栗県にある関刀山だったからである。当時、この地震で三千人余りの命が失われた。死傷者は、後の九二一地震をも上回っていた。現在、慈済は苗栗県に防災教育センターを設立し、減災希望工程により古くて危険な校舎の改築を進めている。それは防災、歴史の記憶、教育という多義にわたる意味を持っているのである。

「減災希望工程とは、災害を未然に防ぐことであり、発見された問題はすぐ解決されなければ災害が発生してからでは間に合いません。大変危険です」。慈済建築委員の王明徳さんによれば、建築チームは常識を超えた高い基準で工事している。「二、三階建ての建物であれば、七階建ての構造基準で建

減災希望工程

慈済は２０１４年より「減災希望工程」を開始した。台湾全土で合計２６校の建築を支援し、老朽化した校舎の安全懸念を解消した。２０１９年から２０２０年の間に、花蓮、苗栗両県にある５つの学校が完成すれば、全ての工事が完了することになる。



てます。四、五階建ての建物であれば、十二階建ての基準で建てます。ですから、安全性は非常に高いのです」。

慈済基金会建築処主任の林敏朝さんによれば、減災希望工程は高い基準の鉄筋コンクリート工法を採用している。一般の建築には、強度三千ポンドのコンクリートを利用するが、減災希望工程では三千五百～四千ポンドのものを使用する。また、良い材料を使用するだけでなく、施工品質も厳重に管理されている。「いつになっても人が問題なのです。ですから建築委員と顧問の視察がこの部分を補っているのです。しかも、建築、構造、装飾など異なる専門の人が一緒に検査にあたっています」。

九二一震災の希望工程の時のように、減災希望工程チームは安全を最優先している。しかし、建物の設計について言えば、減災希望工程による校舎は、同じくグレーを基調としながらも、より躍動的な造形と色彩を用いている。それは、改築された校舎が生命を守ると同時に、使用者や地域社会に親しまれ、人文の効能を発揮させたいがためである。

（慈済月刊六三六期より）

【證厳法師のお諭し】

生命を使って道を切り開き、慧命を用いて導こう

一歩踏み出してこの世に幸福をもたらし、
もう片方の足で智慧を開くのは、
福と慧を同時に修めることであり、
分秒に亘って価値を創造することなのである。

◎訳・慈願　絵・陳九熹

今年の海外養成委員及び慈誠精神研修会は、花蓮静思堂と板橋分会に二回に分かれて行われました。三十三の国と地域の慈済人が台湾で集まって精進し、歳末祝福会にも参加し、千六十四人が認証を受けました。心の故郷の温かさと法縁者の親しみを感じ取ったと思います。

また研修会の各世話チームが帰ってきた海外のボランティアに心を込めて準備して出迎え、異なる文化習慣の人達に合った飲食を用意するなど、心配のないようにしていたことに感謝していると思います。

十一月上旬に板橋で行われた研修会では、神父と修道女も参加し、長年、見返りを求めず衆生に奉仕してきたことに感謝すると共に感服していました。ハイチのルイジ神父は大きく発心して最も貧しい地域で苦難の人達と共にあり、二万人余りの貧しい子供たちの世話をしてきました。慈済には願があります。しかし願力があっても人力がなければ何事もできません。縁があって神父と一緒に人助けができることに感謝します。アメリカの陳思晟（チェンスーチョンこじ）居士はこの数年、何十回もハイチとの間を行き来し、長距離飛行の苦労と大きな生活の違いに甘んじて耐え、長期間、関心を持って寄り添っています。

愛は最も温かくて感動的なもので、彼らが人間（じんかん）に分け入って必要とされることをやり、人々の心の拠りどころになっているのを私は羨ましく思います。

異なる国の慈済人は異なる宗教を信仰していますが、お互いに尊重、敬愛、感謝し合っています。この「愛」には国境はなく、何物にも染まらず清浄であり、区別もなく同一方向に向かって、結集して世間の人々を愛しています。

研修会では、異なる国々のボランティアがそれぞれの言語を話すため、何度か通訳を介さなくてはなりませんが、真の言語は「心」であり、私たちは同じ心を持っているのです。肌の色は違っても同じ道を歩んでおり、それが「菩薩の道」なのです。それも小道ではなく大道であり、小愛からあまねく世に大愛を広めるのは困難なことではなく、私たちはそれをやり遂げているのです！

普段、モザンビークの現地菩薩たちは「慈済の家」の砂や小石の混ざった地面に座って修行していますが、彼らは行儀正しく、その尊重の気持ちで道場を清らかにしています。今年モザンビークはサイクロン・イダイで被害を受けましたが、彼らは首都から千キロ離れたベイラの被災地に支援に行き、人々の愛を啓発し、絶えず福を創ることを願いました。

愛の心に満ちたボランティアたちはまた、人々がさらに彼らに力を与え励まし、一滴の水でもって、アフリカが変わることを願っているのです。物資と彼らの人力でもって多くの人を助けることができると信じています。

ボランティアたちの話を聞いて、大変感動すると同時に心が痛みました。トルコから来たシリヤ人ボランティアはこう言いました。以前何事もなく平穏無事な生活を過ごしていましたが、内戦が勃発しました。少なからぬ人達は目の前で家族が残酷な虐待をうけるのを目の当たりにしました。彼の妻と娘もそれを見て心に陰影が焼き付いたため、故郷を離れてトルコに逃れてきたのです。

そこまで話すと、彼は感情が高ぶりました。私は彼に、過去のことは悪夢ですが、悪夢からも目が覚めますよ、と言いました。無数の愛が彼を温かく包み込み、彼の心にある仇や怨みを放下して、眼前の家族を守り、今日という日を無駄にしなければ未来があり、幸せが代々に亘って伝わっていくことを願っています。

人心の不調や少数の人の衝突で、想像を絶する人災がひきおこされます。この数年来、トルコとヨルダンの慈済人が、私に代わって、シリヤ難民に関心を寄せてケアしてくれていることに感謝します。

苦難の衆生は言い尽くしがたい苦しみを抱えています。ですから菩薩たちは終りのない道を歩き、お互い手をたずさえ、絶えず人心の愛を啓発しなければなりません。時間はとても貴重なものですから、私は絶えず自分を励まし、毎日が生命の価値を有し、一分一秒も無駄にしないようにしてきました。歳末祝福会に出かけられるよう、私は精一杯努力してきました。歩く時はふらつきますが、一歩一歩踏み出すようにしています。片足を踏み出すことが福であり、誰もが福を創り、もう片方の足を踏み出すのが智慧であり、皆の智慧が啓発されることを願っています。一歩一歩着実に精進し、日々福と智慧を同時に修めるよう、皆さんのさらなる精進を願っています！

（慈済月刊六三七期より）

◎文・顔吟修　撮影・林柔縺　訳・本誌

悪役オジサンから許師兄に

「悪役オジサンが来た！」

友人の子供が彼のことをこう呼んだのを耳にしました。許茂忠さんはがっかりして「外見は心から生まれる」と言う言葉が初めて理解できました。タバコと酒に溺れていた彼が徹底して変われる方法はあるのでしょうか。

●台南市東山区のある三合院に住んでいる独居老人は、普段は薪で食事を作っているが、一度転んで右の太股に火傷を負った。ズボンの裾を巻き上げ、当時の様子を説明する間、許茂忠さんがしゃがんで傷口を調べた。

「はい、いらっしゃい！オバサン、お婆さん！果物を買いに来て！」と人通りの多い中を背の低い許茂忠（シューマオジョン）さんは、彰化県田中鎮の農村で懸命に呼びかけました。目の前の果物が全部売れれば生活が潤うのです。

父親は農耕による収入が不安定だったため、長年、家計のために外で働いています。お爺さんが病気で亡くなった後、病気がちのお母さんも許さんが十三の時に他界しました。お兄さんは中学校を卒業してから外地で仕事しながら勉強しており、家の中には彼と小学校三年生の妹だけで、放課後は家の果樹園の世話と家事をし、大変な生活を送っていました。

農園の収穫期になると、彼はいつも夜が明ける前に自転車に果物を乗せて、員林青果市場へ売りに行き、その後それから学校の授業に急ぎました。思春期の記憶には両親の付添いはなく、ただ涙ながらに自転車のスピードを上げていたことだけを覚えているそうです。

消防士の仲間が法縁者になった

子供の頃のそんな生活から、許さんは大きくなったら大金持ちになるという志を立てました。中学校を卒業して直ぐ家を離れて配管工見習いになったのですが、直ぐに職場の悪い仲間とつるむよう

になってしまいました。当時は台湾の経済が飛躍的に伸び、好景気を迎えていました。彼は配管工のリーダーになり、夜市で女性の靴を売ったり、テレビゲームを組み立てたりと、お金が稼げるところならどこにでも行きました。

彼はお金が手に入るとすぐ使ってしまいました。財産は水のように流れ去ると戻って来ず、毎日お酒を飲んでいました。子供時代の貧困から抜け出そうとしていたのですが、いくら楽しんでも、心の中にある欲望は底なしでした。

仕事によって北へ南へと移動していましたが、最後に許さんは台南市東山区にある素朴という町に辿りつきました。そこでドイツの黒ビールを販売し始め、大型トラックで台南の各町に荷物を運んでいました。仕事の無い日は、友人の紹介で消防ボランティアになりました。「他の人が必要としている時に、奉仕する機会があるのは嬉しいことです」と彼は言いました。

彼はその時に沈福利（スンフーリー）さんと盧万発（ルーワンファー）さん、蘇国昌（スーグオチャン）さんなどの消防ボランティアと知り合い、飲み仲間となりました。まさか後日、互いに励ましあい、支えあう慈済の法縁者となるとは想いもしませんでした。

許茂忠さんは感情と事業の双方でうまくいっていると思っていたのですが、立て続けの挫折で家が無くなり、彼女とも別れ、販売代理店の権利が取れず、一切

●許茂忠さんが消防隊のボランティアをしていた時、雀蜂を捕らえ、薬酒に漬ける準備をしていた。（写真の提供・許茂忠さん）

がゼロに帰したのです。彼は人生のどん底に落ち、自分を閉じ込めて酒に浸るようになりました。

慈済ボランティアの陳美恵（チェンメイフイ）さんが功徳金を集めに来た時、「もう功徳金を払う気持ちはない。良い事をしても良く報われないから」と愚痴をこぼしました。すると美恵さんから「良い種子を植えれば、良い結果が得られます。善の根を絶やしてはいけません」と説得されました。許さんはその真摯な態度を見て心が柔らかくなりました。それで暫く善行を続けているうちに、いつの間にか善の良縁が繋がったのでした。

許茂忠さんの飲み友達で、消防の仲間でもある蘇さんは、二〇〇五年に慈済ボ

ランティアの認証を受けた後、以前の悪習を一新して、とても精進していました。彼は許さんが地元に詳しいことから、多くの告別式や助念（注）に誘いました。その関係で許さんはより多く慈済と縁ができると同時に、単純で善良な美恵さんに好感を持つようになり、消防仲間に応援してもらって彼女と付き合い始めたのです。**（注・亡くなった人のための念仏に協力すること）**

その時、陳さんには一つだけ要求がありました。「一緒に慈済に入ること」。言葉で言うと簡単ですが、許さんにとっては一大試練でした。特に慈済十戒の「飲酒しない、タバコを吸わない、賭け事しない」は今まで三十年余りの悪習でしたから、簡単に止められるわけがありません。

内心では善悪が綱引きを繰り広げていた

肌が浅黒く、体が大きい許さんは、何も喋らず立っているだけで人に威圧感を与え、子供たちに怖がられてしまいます。その上、声が大きいのです。友人の家を訪問した時に「悪役オジサンが来た！」と呼ばれたのを聞いて初めて「顔は心の現われ」という道理を理解しました。

許さんは、法師の「善の扉は開けにくいが、悪の道には嵌りやすい」と言う言葉を聞いたことがありました。そして、絶え間ない美恵さんの勧めと、消防ボランティア仲間の国昌さんの導きで、金銭への追及で悪習が深くなり、体も飲酒のし過ぎで危機的状態になっていたことを振り返りました。

医療ボランティア、環境保全、助念など参加する慈済の活動が頻繁になるにつれ、許さんの内心では「善悪の引き綱」が行われていました。以前いつも吸っていたタバコは、法師のお言葉、「五尺余りのいい大人が、短い一本のタバコにコントロールされてはいけません！」で、タバコをやめる決心をしました。

許さんが当初、リサイクル活動を始めた時、なかなか腰を低くすることができませんでした。法師の開示で、「リサイクルの仕事は大地の道場であり、腰を曲げたり、足を伸ばしたりすることは最も敬虔な礼拝なのです」と聞いてから、体で実践し、心も次第に柔らかくなり、人に対する話し方も柔和になりました。昔の飲み友達と偶に会った時、彼の変貌には皆、親指を立てて賞賛しました。

許さんは二〇〇七年に慈済ボランティアの認証を受け、美恵さんの護法金剛と

して、彼女に付添って個別案件の家庭訪問をしています。その時に対象者の苦しみがそれぞれ違っていることに気づき、微力を尽くしたいと思いました。人々が人生のどん底に嵌った時、話を傾聴したり、支援することで、心が慰められて生活が改善できればと思っています。「無意識の中に喜びを感じると同時に、自己を反省し、自分はかなり幸福であると感じました」。

十年以上の家庭訪問の経験から、許さんは、ケアをする時は自分の立場からではなく、情と理と法を兼ね合わせ、相手の立場に立てば、相手が必要とすることが分かってきました。「法師の言うように、誠意と情をもって寄り添うのです。対象者に私たちが本心で支援に来ており、心から彼らの話を聞きたいと思っていることを分かってもらうのです」。

許さんは、「最初の言葉が肝心で、相手の警戒心を取り除かなければなりません。プライバシーを探りに来たのではなく、問題を見つけて話し合い、本当に彼らを支援したいと思っているのですから」と言いました。初めて訪問する時、先ず自分が慈済のボランティアであることを紹介します。誠意のある態度で話し、気にかかるゆえに来たことを伝えるのです。相手が年配者であれば、軽く相手の手を握ったり、手の甲をたたくことで、安心感を与えます。

時に相手はこの真摯な態度に接して涙を流し、心を開き、自らボランティアに感謝の抱擁を返してくれたり、慈済への信頼を表現してくれます。

トラックを運転し、鍬を手にし、手語を練習した

許さんは二〇一一年に「法は水の如し」の経典劇に参加し、手語のチームリーダーを担当しました。鍬を持ったり、大

●ケア世帯は自立した生活ができないため、屋内では悪臭が漂っていたが、許茂忠さんは住居の整理を手伝った。

型トラックを運転することは得意でしたが、彼にとって異なった学習試練となりました。手話を練習する時、よく手の拍子が合わなかったり、手の位置の間違い、遅れ、動きが硬い等の課題がありました。

しかし彼はいつも「心に目標があれば、千キロの稲も運べるが、心に目標がなければ、一本の稲でも腰は曲がってしまいます」と自分に言い聞かせ、励ましたのです。経を唄いながら、劇に出演するのは、自分の人生を格上げすることであり、昔の様々な過ちを懺悔し、頑なな悪習を洗う機会でもあるのです。

経典劇が終わった後、法師は仏法経典をコミュニティに広めたいと期待しました。法の解釈を担当した黄秀菊（ホアンシュウヂュ）師姐（スージエ）は、仏法の演劇チームに許さんを誘いました。新営共同研修センターでは毎週火曜日に読書会を行なっています。中学校しか卒業していない許茂忠さんは尻込みし、自分は仏法知識が浅いため、法師の法を広めることは無理だろうと思いました。

黄秀菊さんはしきりに彼を励ましました、「法師は仏法を生活に取り入れることを期待しているのです。家庭訪問の経験を活かして理を表わし、経典と融合すれば仏法になるのです」。許さんは再び考え直し、人よりも知識がないからこそ、学習できる機会を大切にして真面目に勉強するのです。慈済ではできないことを学ぶことができ、それも授業料はただで生涯学んで成長できる場所なのです。

『無量義経』の経文に、「苦しみを取り除き、法を説く」とあります。暫くすると、許さんは家庭訪問で彼らに心境を変えることを勧めるようになりました。心に善の気持ちと社会に恩返しする気持ちさえあれば、自分の人生価値を変えることができるのです。「布施は金額の多少ではなく、一滴の水が海に流れ込むように、多くの人と良縁を結び、他人のために祝福することは、自分を祝福していることになるのです」。

二〇一八年、台湾南部で熱帯低気圧による水害が発生し、台南市に甚大な被害をもたらしました。許さんは真っ先に、重大な被害を被った地区で暖かい食事を提供しました。見渡す限り海のようになった町の被災者は「前にも後ろにも動けない」状態でした。配付過程で、ある家では赤ちゃんが飲む粉ミルクがなくなったのですが、母親は外に出て買いに行くこともできず、焦っていました。慈済の救済チームは向かいにミルクを売っている店があると聞くと、水に飛び込み、泳いで粉ミルクを送り届けました。赤ちゃん

は泣き止み、母親を安心させました。

五十歳を超えた許さんは苦しい生活をしてきたからこそ、苦しみの味が分かるのです。人は誰でも菩薩になれると信じています。人が寒さを訴えれば、衣服を提供し、お腹を空かせた人がいれば、食事を提供します。彼がこのようにするのは、より多くの人が慈済に来て、生命の価値を成就することに期待しているからです。（慈済月刊六二九期より）

●精進組の許茂忠さん（右）と蘇国昌さん（左）は夫々木魚とおりんを持って、大衆の先頭に立って3歩ごとに礼拝しながら、仏堂に向かって進んだ。（撮影・梁啓興）

人文教育

慈済大学見晴医療奉仕隊の 晴天を探す旅

◎文・呉宛霖　絵・Kaixin Chen　訳・慈願　写真の提供・見晴医療奉仕チーム、蔡斗元

慈済大学医学部の学生たちは見晴村の原住民居住区を訪れ、子供たちと心を交わすことで見聞を広めた。彼らはここで拒絶されたり必要とされたりしながら、自分を再認識して柔軟かつ強くなった。そして彼らは分かったのだ。どんなに些細なことでも正しいことをやれば世界を変えることができ、自分にも他人にも晴天をもたらすのだということが。

Vネックの青い手術着に着変えると、三十歳を過ぎたばかりの牛光宇（ニウグアンユー）は西部にある総合病院の救急外来に入った。救急医である彼は、分秒を争う日々では迅速に死神の手から人々の命を救っている。たまに落ち着いた時はパソコンでカルテをタイプしている。彼はいつも目の前のやるべき事に専念する有

能な人間であり、医学部を卒業して十年目ですでに主治医師に昇格していた。だが多忙な彼には医学生時代を回想する暇は余りない。

一年ほど前、彼は台湾から直線距離にして九千キロ以上離れた太平洋に浮ぶキリバス共和国へ医療支援に行ったことがある。その時、台湾では救える命が此処では医療不足のために、救われていない現実を目の当たりにしていた。

心痛のあまり彼は、小規模のＩＣＵ病室の建設に着手し、一年間の滞在期間中に緊急医療の手引きを編集し、初期検査や診療の振り分けなどの方法を設計し、この小国家で初めてＩＣＵ病棟を立ち上げた最初の台湾人医師且つ推進者となった。

「それが正しいことならば必ず誰かが助けにきてくれる」この言葉は牛光宇の座右の銘であり、信念でもある。

二〇〇二年、彼は台南から中央山脈を越えて花蓮の慈済大学医学部に入学した。最初の四年間は多くのサークル活動に参加して、積極的に実力を蓄え、五年生の時には医学部学生会の会長に推薦された。その時の彼の夢は一学年に一クラス五十名しかいない慈済大学医学部で一年生から七年生までのうち求心力のある学生を集めて、それぞれ医療の専門を発

揮させることだった。

彼はかつて離島や山間の部落へ行って奉仕したことがあった。彼の目から見た原住民の生活は自分たち程良くないが、何時も行く度に現地の人たちとの真摯な付き合いの中で、最も感激を受けたのは子供達との出会いだった。「私たちがしてあげられる事に限りがあっても、子供達は私たちを信じて仲良くしてくれるのです」と語る。

先住民から信頼を仰ぎ、堅い友情に結ばれながらも、振り返って考えると東部唯一の医学部の学生として彼らに対し何ができるだろうかと思った。「私はこの土地に対して、例えようもない感情が生じ、『責任』を感じました。通りすがりの旅行者ではなく、彼らの仲間になれるよう努力しなければ」と思うようになった。

台北から花蓮へは他の大学のサークルも奉仕をしにきている。花蓮の慈済大学は山間部に最も近い大学なのだから、なおさら山奥の村々に入って奉仕しなければならないと牛光宇は考えた。そして医療奉仕隊を組織するという考えが芽生え、次第に支持を受けるようになり、医学部副会長の荘傑貿（ジュアンジエマオ）、大学四年生の陳則叡（チェンゾールイ）、林進偉（リンジンウェイ）、三年生の連子賢（リエンズーシエン）、顔志傑（イエンジージエ）、二年生の林偉琳（リンウェイリン）、厳嘉琪（イエンジアチー）、一年生

の盧星翰（ルーシンハン）、陳亮萱（チェンリアンシュエン）らが参加した。

何事も始めはすべてに困難が付きものだ。協力者を探すこと、拠点選び、指導教師を求めること、経費の募金等一歩一歩進めなくてはならない。幸い行動を始めようとした時、各界からの支持を受けた。中でも慈済大学医学部主任の許明木（シューミンムー）医師が経費の支援など多くを提供してくれた。

これは錦上に花を添える程度ではなく、雪中に炭を送る支援となった。なぜなら学生にとって資金集めは最も困難な事なので、それさえ十分であれば大手を振るって前進できるからだ。

目的を調整して自信を取り戻す

一回目の奉仕は鯉魚潭付近の銅蘭小学校を選んだ。小学生の学童保育と衛生教育を行い、良い結果を出したが、問題も次々に浮かび上がった。東部地域における奉仕隊の必要性をもう一度考えなければならなかった。子供たちは休日になると、外部からやってくる学生のイベントにいろいろと参加しているので、本当に必要なのは平日付き添ってくれる現地の大学生なのである。

そこで中心幹部は活動の目的を調整し、次の冬休みの研修会には現地の要望に応えるだけでなく、すべての後輩達に自信を取り戻させなければならない。

●見晴らし奉仕隊は毎年冬休みに2泊3日の合宿を行っている。写真は2018年の記念撮影。

最初に萬栄郷の見晴小学校を訪問することになり、医学部六年生に進学する牛光宇と隊長を引き継ぐ陳則叡、次回の担当者となった顔志傑の三人は国道九号線を見晴村へとバイクを走らせた。

直線道路をひた走ると沿路は山脈、街路樹、雑草が続き、たまにぽつんと家があるだけで、三人は通り過ぎたのではないかと思ったが、寿豊郷と鳳林鎮を過ぎて右折した小道から中央山脈に向かって前進すると小さな村が見えた。

ここが中央山脈の麓にあるタロコ族居住地区で、現地の人が「みはらし」と呼ぶ場所だった。水田に沿った道を曲がり雑木林を抜けると、カトリック教会とプロテスタント礼拝堂、小学校、集会所等の建物があちこちに見えた。

見晴村は萬栄郷の中で最も規模が小さい。以前はトウモロコシ、落花生、サトウキビ半年に一度収穫される農作物や稲が植えられていたが、今ではもう見られない。実際に見晴村に住んでいる住民は四百人あまりで、それも子供や年寄りが大部分である。唯一の小学校である見晴小学校の児童数は四十七人で幼稚園児は十八人だけだった

彼ら先発隊が着いた時の第一印象は「見晴村は世の中から取り残された山奥」だった。村全体が眠りの中に静まり返っているようで、たまにやせ細った犬を見かけるだけだった。幸い静まり返っている小学校の敷地は整然としていて、教材も揃っており、一クラスの人数は十数人だった。

学校側の話によると、普段、児童は下校すると何もすることがないそうだ。大多数の両親は西部で職に就いたり出稼ぎに行っており、祖父母と生活している子供が六割から七割に上る。遊び相手がいなくて、祖父母の言うことも聞かないため、外でぶらぶらしているという。

学校側は大学生の奉仕を歓迎しているが、厳しい面もあり、当時の教務主任の許寿亮（シューショウリアン）は、医療奉仕隊は奉仕の内容を先ず学校側と討論し、慈済の医学生は水面に止まるトンボのようにではなく、学期中も冬休みも定期的に活動を行って関係を継続してほしいと頼んだ。

許主任は医療奉仕隊に協力を願い出た。教育現場或は居住地区の問題に限らず、学校側が重視している事柄を奉仕隊から伝えてもらったり、劇やイベントを通して体験させることで子供達に進歩して欲しいと願ったのだ。同時に見晴での奉仕内容は、活動が終わっても学校の授業で取り入れていくことになった。

ここの一員になれるように

医療奉仕隊は新たな心構えで見晴小学

毎年の見晴村に

毎年の合宿期間子供たちが最も期待するのは早朝の歌と体操である。見晴らし隊員は様々な授業の教案を立てて子供たちが交流しながら学ぶ意欲を駆り立てている。医学生は三角巾による傷口の縛り方を教え、子供たちはタロコ語を教える。「地域地図」の授業では子供たちが隊員を居住地に案内して紹介し、一緒に清掃する。

校の意見を受け入れ、銅蘭小学校での経験を以て足並みを調整した。学生は奉仕を受ける子供達にとって重要なことは「医療」ではなく、寄り添いである事が分かったのだ。それが彼らの最大の目的となった。

牛光宇はまた、自分たちは「医療」と言う看板を掲げているのだから他の奉仕隊と異っていると思っていたが、台湾には全民保険があって医療は相対的に普及し、実際無医村は少なくなってきている。更に大きな思い違いは医学生のやる医療には「限りがある」か「用をなさない」に近いということだった。

当時慈済大学医療奉仕隊を設立した時の理想は、すべての隊員が奉仕の機会を通してこの土地について理解を深めることだった。牛光宇は、以前花蓮や東部に医師が長く留まることがなかったのは事実だと言う。「私の理想は医療関係者が皆この土地に愛着を持つようになることであり、医療を通して何かを変えようとしたいのではありません」と言った。

初めて医学を志した頃の情熱を抱いたままの学生達が力を尽くした七年の学生生活の中で、その体験は学校内の授業や実習だけにとどまらなかった。実習が終わると比較的生活環境の良い所へ行く方がいいだろうか、それともここの人達と共に成長し、そこの風土を認識して卒業

後もここに留まることにしようか、と考えたものである。

そこで、医療を主要目的とせず、部落の認識と長期的な子供たちへの寄り添いを目的として、二〇〇七年中央山脈からさらに南の萬栄郷見晴村へと医療奉仕隊は前進し、少し長いが新しい名称「慈済大学医学部見晴村医療奉仕隊」、略称「見晴らし奉仕隊」が改めて誕生した。

初めて見晴らし奉仕隊が出発したのは冬休みが終わった四月から五月にかけてだった。学生たちは二台の観光バスをチャーターして、教材や色々の道具を用意し勇んで学校へ向かったが、思いもよらず土砂降りの大雨。これでは誰も来ないかもしれない。隊長が廊下へ行ってみたが、校舎は一列の建物しかなく、運動場は雨で水浸しで、雨を遮る建物はなく、このまま雨が降り続ければ活動は流れてしまう。

そのうち思いがけず一人又一人と子供が訪れ、誰が来ていないかわかると、走って呼びに行ってくれた。高雄で育った顔志傑は熱い思いに駆られた。ここの子供たちは都会と違って皆、知り合いで、約束を守るのだ。雨であっても、ケータイを持っていなくても、約束通り来るのである。

初めて来村した医学生による奉仕隊は五十人ほどだが、見晴小学校は一年生

から六年生の全校生徒でも五十人足らずである。雨の中の初顔合わせで、医学生たちは情熱的な表情を浮かべていた。活発な子もいれば、恥ずかしがり屋、無表情の子供、怯える子など様々で、中にはおしめをしている子もいた。

そのうちに途中から入る者、父兄が弟や妹、おしめを付けている幼児まで連れて来たので、まるで託児所のようになった。学生は小学生に、用を足した後や食事の前には手を洗うこと、食事の作法、歯ブラシの使い方、そして蟯虫検査のやり方をゲーム形式で伝えた。子供達は盛り上がり、学生の背中に上る子もいた。

雨だったため、初めての活動は教室で行われた。初めは皆、がっかりするものと心配したが、思いもよらずいつまでも遊んでいたそうだ。学生が引き上げようとした時「何時また来てくれるの？」と口々に言う子供たちに、学生たちは心が温かくなり、責任感のようなものを覚えた。始めは交通が不便な上に雨だったので一回きりになるかと思っていたが、二度、三度と来るようになり、その度に参加する子供たちも増え、心配も消えていった。

（慈済月刊六二八期より）

部族の子 医者になり故郷へ戻る

自分はここで成長し、故郷に帰って奉仕している。王傑熙（ワンジェシー）は誰よりも現地のことを考え、子供たちを励ましている。どんな困難があっても、人生の中でどんな可能性をも諦めてはいけない。

◎文・呉宛霖　訳・慈願

見晴らし奉仕隊の設立から三年目の二〇〇八年、医学部の新入生の王傑熙が参加した。入学手続きに行った時、掲示板に見晴らし奉仕隊のポスターがあるのを見て彼は驚きを隠せなかった。なぜなら彼の故郷は見晴村であり、彼はそこで育ったのだ。

当時、彼の両親は出稼ぎに行っていて、姉兄妹や従兄弟たちと見晴村の祖父母のもとで生活していた。父母が休暇で帰って来た時だけが一家の団欒だった。そして、小学校に上がった時に初めて父母の

●見晴らし奉仕隊は地域の人々に衛生教育を行い、健康相談を受け付ける。

もとで暮らし始めた。

彼が初めて故郷へ奉仕に行った時、自分は「カッコイイ」先輩を気取っていたが、子供たちと一緒にいると二十年前の自分に戻ったかのような気がした。今このいたずらっ子たちがしている遊びはすべて、以前の自分がやっていたことなのだ。子供たちはいたずらがしたいのではなく、無邪気でその実、感情が豊富なだけだということを彼は理解していた。

彼の小学校のクラスメートに作業員なので故郷に残した娘の世話を他人にまかせている人がいた。彼と母親が時々、絵本やクレヨンを買い与えているうちに、その子に絵の才能があることを見出した。しかし子供たちの趣味と理想は往々にして現実と環境に左右されてしまうことを彼は知っていた。

「手伝ってあげたい、しかし能力には限りがある」。これが彼の奉仕隊員として感じる無力感だった。そうであっても、彼が奉仕隊として関わることで故郷の子供たちを導く以外に、外部の人たちに社会問題と家庭の仕組みを見せることもできると考えた。「この問題は自分の故郷だけでなく、ほかの貧困地域にも言えることです」と言った。

彼は、貧しいからといって寄付を募るだけではなく、社会が貧困の原因を理解して、社会の仕組みを変えることによってこのような家庭の崩壊が避けられるのではないかと思っている。自分は故郷で成長し、今は帰ってきたので、同じ境遇の子供達を思い遣り、導こうと話しかけた。自分の両親は出稼ぎに出て苦労し、家庭環境は良くなかったが、それを乗り越えて大学を卒業したのだと子供たちに伝えた。

彼は必ずしも勉強だけすれば成功するとは限らないが、「学業は完成させなければなりません。その過程で絶えず自分を探して見つめながら、どんなに辛いこ

とがあっても諦めずになりたい自分に成ってほしいのです」と子供たちに言い聞かせた。

王傑熙は最初、輔仁大学医学部に合格していたが、台北の生活費が高いことを考慮して、先住民公費生試験のある、慈済大学医学部の試験を受けて合格した。

五年生と六年生の実習の時によく部落から来た患者に出会った。なつかしく思ったが、なぜ病院に来たのだろうか？もしも病院のベッドに横たわっている患者が、家族や知り合いなら、自分はどう感じるだろうか？と思った時、プライマリ・ヘルス・ケア（基礎医療保険）を彼は志した。

部落の人々は病気に対する常識に欠け、軽い病気を見過ごし重病になっている。「私が台北や台中の病院で実習していた時、軽い病気でも診察に来る人が多かったのですが、故郷の人たちは肺結核になって数週間も咳しているのに、診察に行こうとせず、病院に行った時はすでに敗血症になっていたりするのです」と彼は感慨深げに言った。

山間部のような場所であっても、衛生教育と基礎サービスによって予防を進めることができ、家庭医学科は正に住民にとって大きな助けになっている。これが彼を家庭医学に投入する願力になり、この機会にプライマリ・ヘルス・ケアを学んで実力をつけようと強く決心したのだった。

彼にとって見晴らし奉仕隊に参加した経験が、大きな啓発となり、今の彼を支えているのだという。見晴らし奉仕隊の家庭訪問では、医療を行う前に先ず彼らの生活環境、言語、文化を理解することになっていた。もし彼らの生活習慣を理解せずに基礎医療行為をすれば、様々な問題に遭遇していただろう。

子供たちと一緒にいるともっと多くのことをしてあげたいと思うそうだ。容易なことではないが、これは自分が学ぶ機会であり、また挑戦でもある。診察室で患者と向かい合った時、患者は医師に問題の解決を求め、医師は患者の病状を理解して治療し、さらに彼らの生活にも気を配る必要があると語る。

奉仕される側だった子供が、見晴らし奉仕隊の役割の関係で、今は指導者に変わった。以前は大勢の奉仕隊の先輩たちに教えられていたが、今は自分がその一員として伝承していることに感動を覚える。彼は子供たちが成長して自分を発見し、強くなって故郷に尽くすことを願っている。

（慈済月刊六二八期より）

シルバー世代の養生法

体と心、頭を使い、自信を持って
人の役に立つことで、衰えを遅らせることができる。

◎文・釋徳侃／訳・済運

多機能リサイクルセンター

台大病院の王正一（ワンジョンイー）教授と證厳法師の縁は花蓮慈済病院建設の準備段階に始まり、病院開業後、人事と行政及び医療教育を手伝いました。王教授は台大病院を定年退職後、毎週、花蓮慈済病院で講義すると共に、慈済医療志業の役員になりました。九月六日、王教授が来訪した時、法師はその場にいた医療志業の管理職たちにこう語りました、「王正一教授の人生には一心一志しかなく、患者と医療教育のために尽力したことは敬服に値し、感謝すべき医師及び学者なのです」。

王教授は法師と高齢者長期ケアについて話し合いました。今、高齢化社会を迎えて、高齢者の問題は社会の大問題になっています。心身共に健康であれば、自立した生活ができ、逆に人生経験と智慧を活かして社会全体を格上げすることができるのです。最も政府と社会の支援を必要とするのは、長期間寝たきりまたは認知症患者の家庭です。

「私たちは皆、高齢者が適切なケアを受けられることを望んでいますが、それには一般大衆の高齢者に対する考え方と態度を改め、高齢者の社会に対する貢献とその価値を認識する必要があり、感謝と尊敬の気持ちで以て接することで、高齢者が尊厳を持って生活できるようにすることが大切なのです」と證厳法師が言いました。

「高齢者が病気になるのは自然の法則ですが、知力の低下や認知症は最も憂慮すべきことです。人によっては体が丈夫であっても認知

症を発症して家族のことを忘れたり、二十四時間介護する必要があるため、家族の心身や生活にとって大きな負担となるのです。医療の発達で認知症の治療ができるようになることを期待するだけでなく、慈済は一民間慈善団体として地域社会で支援とケアを行っています」。また法師によれば、地方の慈済ボランティアは、大林慈済病院認知症センターの曹汶龍（ツアオ ウェンロン）主任及びそのチームと協力して「記憶保養クラス」を開設しました。即ち、医療の専門家と地域ボランティアが協力して多方面から認知症患者の家庭をサポートするのです。

法師は、行脚した時に記憶保養クラスの参加者に会いましたが、その人は六十歳余りで既に認知症になっており、それを見て心が痛んだ、と嘆きました。また、認知症の肉親をケアする家族の心労の話を聞き、とても悲しく思いました。「家庭によっては他人に認知症患者を抱えていることを知られたくないといって、どんなに苦労しても外部からの支援を求めないため、慰問や励ましを難しくしているのです。また、認知症患者の家庭に関心を寄せるといっても数人でたまに訪問するだけで彼らの苦しみを解決できるわけではありません。かなりの人数を投入して大きな心から出る力を奉仕すると共に、医療等多方面からの支援も必要であり、実に容易なことではありません」。

法師がかつて皆さんに語ったように、家庭こそが最高の養護ホームなのですが、今の家族構成と人々の考え方は以前と全く違っています。そして、もし患者に医療ケアが必要になった時、一般的な家庭にケアする能力があるとは限りません。

「健康な家庭は三世代、四世代が一つ屋根の下で暮らし、子供が親に孝行し、中間世代が結婚して子供がいれば、模範となって子供に自分たちの親に対する孝行を見てもらうのが家庭教育であり、倫理秩序を代々伝承していくべきです。これは私の理想ですが、今の若い人は殆どが故郷を離れるため、お年寄りが独りまたは夫婦で暮ら

すしかありません。一旦病気にでもなれば、ボランティアに頼るだけでは完璧なケアを受けることができないため、専門の長期ケア人員にも参加してもらう必要があるのです」。

法師によれば、お年寄りが寝たきりでも認知症であっても生活は他の人に頼るほかなく、それは誰も望まない状況ではあっても、未然に病気や認知症、事故による怪我を減らすことで衰えを遅らせることはできるのです。慈済には数多くの八十、九十歳または百歳を超えた高齢者がいますが、健康で精神的にも思考や反応がとても速いのです。未だに社会で大勢の人と一緒に地球環境を守るために奉仕しています。認知症や衰えは平素からの行動によって予防や改善ができるのです。

「これら慈済人は私よりも年上ですが、いつも慈済のことを考え、どうやって人助けし、思いやることができるかを考えています。心も頭も休むことなく、体も動き続けているのです。慰問や家庭訪問

以外に、地域社会で資源回収を行い、リサイクルセンターで分別の仕事をしています」。

台湾全土にある慈済リサイクルセンターは毎日、八万人余りのボランティアに分別の仕事を提供して喜んでもらっており、彼らの生活の中心になっています。リサイクルセンターは地域のお年寄りのデイケアセンターにもなり、自立した行動ができる人や多少行動の不自由なお年寄りが子供や孫が出勤したり登校している間、自分自身も安心して過ごせる場所となって多くの同年代のボランティアと一緒に善行し、子供が退勤してから迎えに来ることができるのです。こうすれば、お年寄りは独り寂しく家で過ごす必要はなく、体や脳の活性を保って衰えを遅らせ、自分たちもまだ役に立つのだと自信を持つようになり、人生に尊厳が出てくるのです。慈済リサイクルセンターが発揮する功能はお年寄りの「デイケア」の参考となるのではないでしょうか。（慈済月刊六三六期より）

慈済大記事十二月

訳・済運

12・01	日本関西の慈済ボランティアが配付活動を行った。大阪市あいりん地区のホームレス収容所で肌着と靴下、タオル、毛糸帽子などを配付すると共に、街頭のホームレスに保温品と温かい食事を届けた。
12・03	◎オーストラリア、ニューサウスウェールズ州とクィーズランド州で森林火災が猛威を振るっている。シドニーの慈済ボランティアは3日、ケンプシー市ウィラワリン地区を視察すると共に、市政府及び火災再建支援ボランティア団体（Blaze Aid）と今後の支援方針を相談した。また、ゴールドコーストの慈済ボランティアはクィーズランド州消防救難サービス（Queensland Fire and Emergency Services）を訪れ、災害救助人員を慰問した。 ◎台湾、アメリカ、ドイツ、マレーシア等の慈済ボランティアと職員10人で構成された慈済基金代表団が、3日から13日までスペインで開かれた「国連気候変動枠組条約第25回締約国会議（COP25）」に参加した。関連会議に出席すると共に、慈済のエコ活動及び浄斯人（ジンスー）間会社の科学製品を紹介するブースを設置して他団体と交流した。また、6回の記者会見を開くと共に論壇を主催し、菜食による環境保全とCO_2を減らす生活理念を訴えた。
12・04	慈済アメリカ総支部は、ロサンゼルスフードバンクを第17回アニュ

	アルチャリティーディナーに招待し、２０１９年度「最優秀コミュニティー精神仲間賞」を授与した。
１２・０５	◎行政院防災救済室と教育部、科学技術部、花蓮県政府の指導の下に、慈済基金会と国立科学工芸博物館は「防災意識を呼び覚ますＤＮＡ」と題した展示会を開催した。５日に花蓮静思堂で開幕し、２０２０年４月２６日まで催される。また、慈済は科学工芸博物館と共同で防災教育を推し進める合意書を交わした。 ◎花蓮慈済病院は協力関係にある多数のバイオテク会社と５日から８日まで、台北南港展示館で開かれた「２０１９台湾医療科学技術展」に参加し、細胞療法におけるイノベーション及び臨床成果を報告した。内容には、漢方医学と西洋医学による合同治療、抗骨粗鬆症治療、新

	薬開発、イノベーション医療器材、国際医療、フィリピンでの発展などに関するする成果の報告とテーマ講座などがある。 ◎慈済大学は５日から８日まで模擬手術講座を開催し、医学生３１人と医師３２人が参加し、「無言の良師」の体で３７項目の基礎及び応用手術を学んだ。９日に葬儀と感謝追悼式及び入棺式が行われた。
１２・０７	慈済科技大学は創立３０周年、台南慈済高校は創立１２周年を迎え、本日、記念行事が行われた。また、慈済科技大学看護学部ビルの落成式が行われた。
１２・１１	◎台湾、タイ、マレーシアの慈済ボランティアと職員で構成されたラオス水害配付慰問団が１１日から２０日までサワナケス州とチャムパ

サク州で米と種もみの寄贈式を行うと共に、配付現場各地で活動状況の視察と家庭訪問を行った。

◎病院の評価及び医療品質の向上を目指す台湾連合委員会は「第２０回医療品質賞」の授与式が行われ、花蓮、大林、台中、斗六等４つの慈済病院及び台中慈済介護の家がそれぞれ、テーマ部門、実証医学部門、バーチャルリアリティー部門で合計１８の賞を獲得した。

◎慈済大学の劉怡均学長は神経科学の研究において、タイ神経科学会の招聘を受け、本日バンコク・チュラホーン研究所を訪れて講演すると共に、終身栄誉会員及び傑出女性科学賞を授与された。劉学長が台湾とタイの神経科学教育共同研究に大きく貢献したのが認められたものである。

１２・１１

慈済大学は教育部の「２０１９年度生命教育の特色を持った学校」において表彰された。本日、人文所の劉議鍾主任が代表で出席し、南華大学で賞状を受け取ると共に成果を報告した。

１２・１２

慈済基金会第２回「ＦＵＮ大きな視野・未来に向かって・青年公益実践プロジェクト」は３月に始動したが、最終的に採用された１０組のチームが本日、専門家の尽力と各方面の人脈資源が結合したことによる成果を台北華山文化イノベーションパークで発表した。

１２・１５

２日、中型の台風２８号がフィリピン中部に上陸し、ソルソゴン州に甚大な被害をもたらした。マニラの慈済ボランティアは視察した後、本日当州のブラン地区で２２００世帯に米と毛布及び慰問金を配付した。

１２・１８

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０２０年１月１５日発行・２７７号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

飢えと寒さをしのぐ希望をのせて

シエラレオネ共和国の首都フリータウンで今年八月、深刻な水害が発生し、住民１万人余りが影響を受けた。慈済とカリタス・フリータウン基金会、ランイ基金会、ヒーリー基金会は手を携えて、被災後の緊急支援に続き、１１月中旬に一連の配付活動を行った。台湾からの愛情に満ちたエコ毛布、衣類、五穀粉が入った袋を手渡すと、被災者はそれを頭に載せて家に向かった。

（文、撮影・蕭耀華　フリータウン・カルバート地区 2019.11.14）

慈済日本サイト　慈済ものがたり